

都賀庭鐘読本における『水滸伝』の受容について

任 清 梅
(青島大学)

目 次

1. はじめに
2. 『英草紙』における『水滸伝』の受容
3. 『莠句冊』における『水滸伝』魯達の人物像の受容
4. おわりに

1. はじめに

近世読本は中国白話文学の影響を受け発生したジャンルであることは、すでに周知のことである。石崎又造氏の『日本近世における支那俗語文学史』¹⁾、中村幸彦氏の「読本発生に関する諸問題」²⁾などはこれについて詳しく論じられている。

読本は前期読本と後期読本に分かれる。前期読本は短編白話小説（たとえば、三言二拍）の影響を受ける。作者と出版社のほとんどが大坂にある。これに対して、後期読本は長編章回体小説（たとえば『水滸伝』、『三国志演義』）の影響を受け、作者と出版社のほとんどが江戸にある。

読本の嚆矢とされる作品は都賀庭鐘の『英草紙』（寛延二年）である。都賀庭鐘は中国の白話小説集『諭世名言』、『警世通言』などから素材を選び、読本を創作し、『英草紙』を寛延二年（一七四九）に出版した。

都賀庭鐘（享保三年〔一七一八〕～寛政三年〔一七九一〕）は大阪の生まれである。彼は享保末年に京都に遊学し、香川修庵に医学を学んだ。白話文学の大流行を背景に、都賀庭鐘は読本の三部作『英草紙』（寛延二年〔一七四九〕）、『繁野話』（明和三年〔一七六六〕）、『莠句冊』（天明六年〔一七八六〕）を世に問うた。読本以外に、寛延四年（一七五一）明の何喬遠の『閩書南産志』二冊を刊行し、宝暦五年（一七五五）明の李卓吾輯『開卷一笑』の巻二を訓訳し刊行した。明和八年（一七七二）、『四鳴蟬』を刊行し、安永九年（一七八〇）『康熙字典』の翻刻

を刊行した。そして唐本の『康熙字典』の引用文の誤りを九百条訂正した。天明元年（一七八一）『呉服文服時代三国志』を刊行し、文化三年（一八〇六）に『義経磐石伝』を出した。

本稿では、都賀庭鐘の読本における『水滸伝』の受容について考察したい。

2. 『英草紙』における『水滸伝』の受容

「はじめに」のところで触れたが、『英草紙』はおもに都賀庭鐘が『諭世名言』、『警世通言』の中から素材を選び、翻案した作品である。『英草紙』は五巻五冊からなっており、全部で九話ある。九話の中、七話が『諭世名言』と『警世通言』を典拠としている。残りの第六話の「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」は『青瑣高議』を典拠としている。また第七話の「楠弾正左衛門戦はずして敵を制する話」に関して、中村幸彦氏は、この第七篇は『庄内物語』などに見える出羽国大山の武藤義氏の滅亡を舞台に、和漢の雑史・小説に見える軍略の奇法を採り入れて作ったものである³⁾と指摘し、と同時に、その戦略を『水滸伝』や、『通俗漢楚軍談』から案を得たと推測している⁴⁾。

『英草紙』のこの第七篇は、ほかの八篇と違って、唯一戦いを取り扱っている作品で、戦略をうまく描いた作品である。中村氏の指摘は頭注ぐらいしかないと、本節では、より詳細な比較を通して、この第七篇に使われている『水滸伝』の内容を明らかにさせたい。

第七篇の粗筋を見てみよう。

出羽国の大山城は、武藤氏が代々所領してきた。その十八代目の義氏は武勇自慢で、百姓のことを考えず、無益な戦争ばかりを起こして、兵卒にも嫌われていた。しかし、彼は生まれながらの力持ちで、敵と斬りあう時には、これに近づくものはいないほ

どであった。

隣の郡の川北というところに、七党とって、頭立った侍が七人いた。昔はいずれも武藤家に仕えていたが、義氏の無道を嫌い、武藤家に従わなくなり、七人が一致して、各自の領土を守っていた。義氏は七党の態度に怒り、代々の家臣東禅寺右馬介に七党を討伐させようとした。

七党の中に楠弾正左衛門という人がいて、日頃兵法を好んでいた。彼は七党のリーダーとなって、いくつかの計略を立て、ついに義氏を滅ぼした。これらの計略を見てみよう。

(1) 離間策—『水滸伝』第三十四回「鎮三山大開青州道 霹靂火夜走瓦礫場」の趣向利用

楠が考え出した一つ目の計略は敵軍の旗や、指物を作って、田川を東禅寺に装わせて、義氏と東禅寺との仲を離間する離間策である。

義氏が東禅寺を大将にして、川北を討伐するのを聞いて、楠は七党の一人の田川に「急に東禅寺が旗印、さしもの等を似せこしらへ、こよひ間道をめぐりて、大山の本城にとりかけ、東禅寺右馬介、義氏をうらむることありて、諸卒と共に謀反すと披露し、戦をいどみ、よいかげんにしてひきとるべし」⁵⁾と策を伝えた。

田川は楠の言ったとおりに、東禅寺の旗印と指物の偽物を作って、風体を東禅寺のようにして、間道を回って、大山城に押しかけ、「屋形に御腹めさせんため、東禅寺右馬介、途中より取ってかへしたり」と叫ぶ。義氏ははなはだ怒り、二百精兵を使って、田川が扮する東禅寺を追いかけたが、田川はうまく逃げ出した。

本当の東禅寺は本城で戦いが起こっているのを聞いて、引き返して城に入ろうとした。すると、城から無数の矢がいかけられ、また妻と子の頭が投げ出された。東禅寺はこれを義氏の悪行だと思い、大衆に力を合わせて、義氏を殺そうとして、何度も攻撃をしたが、義氏自らの防戦で、東禅寺も疲れはて、いったん退却した。義氏も東禅寺の心が変わったと見て、今度は自分で川北を攻めようと準備する。

この離間策によって、楠は義氏の兵力を減らすことができ、また、東禅寺と義氏との間にうまく亀裂が入ったために、後に東禅寺に協力してもらうこと

ができたのである。

敵側のものを使って、その目を欺くような戦術は『水滸伝』の中にも見られる。それについて中村幸彦氏は以下のように指摘している⁶⁾。

旗印を他人の、または敵の軍のものを用いて、敵を欺くこの方法は、『水滸伝』(百二十回本)第三十四回、秦明を味方にするため、秦明の兵隊の服装で、まず青州を騒がせた一条による。真の秦明が帰った時には、青州側はその妻を殺して、秦明を入れなかった。よって秦明は青州を離れる。

中村氏の説明が簡略であるため、『水滸伝』の筋について、もうすこし説明を加えよう。

秦明は黄信から手紙を受け、花栄が清風山の強盗たちと仲間になって、朝廷に反しようとしていると知って、自ら五百大軍を率いて、清風山に向かった。が、戦いの中で、失敗して、捕まった。花栄、宋江たちは彼を招待して、疲れた彼に酒をたくさん飲ませた。そのため、秦明はすっかり酩酊し、翌日の夜明けになってやっと目覚めた。彼は急いで城に戻ったが、たくさんの人が死んで、倒れているのを見て、驚愕した。城に入ろうとするが、敵とされる。そして、慕容知府は秦明が昨日の夜城に帰って、百姓を殺したと言って、彼を捕まえようとする。秦明は自分のしたことではないと訴えたが、慕容知府はつぎのような行動を取る。

知府喝道、①我如何不認的這斷的馬匹、衣甲、軍器、頭盔、(波線は筆者、以下同)(中略)你如今指望賺開城門取老小、你的妻子今早已都殺了。你若不信、与你頭看。軍士把槍將秦明的妻子首級挑起在槍上、教秦明看。秦明是個性急的人、看了渾家首級、氣破胸脯、分說不得、只叫得苦屈。城上弩箭如雨点般射將下來、秦明只得回避⁷⁾。(知府は大いに怒り、「きさまのその馬、鎧、武器、兜を、私に分からないはずがない。(中略)今城に入って、家族を連れ出そうとしているだろう。きさまの妻は、今朝とつくに殺してしまった。信じなかつたら、頭を見せてやろう。」と言った。すると、兵士は槍を取り、秦明の妻の頭を穂先にかけて、秦明に見せた。秦明は気が短くて、妻の頭を見るなり、胸もはりさけんばかりにかつとなり、いい

わけもできずに、ただ「ひどいこと」ともだえるばかり。そこへ、城から矢が雨のごとく射込まれてきて、秦明は仕方なく身を避けた。）

そして、ついに宋江はその真相を打ち明ける。
総管休怪。昨日因留総管在山、堅意不肯、卻是宋江定出這條計來、②叫小卒似総管模樣的、卻穿了足下的衣甲、頭盔、騎着那馬、橫着狼牙棒、直奔青州城下、点拨紅頭子殺人。（総管どの、どうか私達を責めないでください。昨日、貴方を山にひき留めようとしたが、堅く断られたので、宋江がこのような策を考え出した。あなたの姿によく似た部下に、貴方の鎧、兜をつけさせ、その馬に乗らせ、狼齒棒を横たえさせて、青州城下へやり、手下の者たちを指揮させて、人殺しをやらせたのです。）

さて、ここで『水滸伝』三十四回の内容と『英草紙』第七篇の内容とを、詳細に比較し、中村氏の説を再検討してみたい。

上の引用文の傍線部、②「叫小卒似総管模樣的、卻穿了足下的衣甲、頭盔、騎着那馬、橫着狼牙棒、直奔青州城下」の部分は、自分の部下に秦明の格好をさせた箇所である。秦明を自分たちの仲間に入れるために、秦明の服装、兜、武器などを使って、敵の知府を欺いたのである。夜なので、知府は秦明の顔がよく見えず、服装、兜、武器以外では、秦明であるかどうかを判断する方法がなかったのである。

同様に、第七篇の中においても、「田川下知にまかせ、俄に東禅寺が旗印をこしらへ、みづから②右馬介が体に出でたち、其の夜間道より出でて、大山の城へ押し寄せ」たのである。

楠が田川に東禅寺の風体を装わせ、城に取りかけさせた。これも夜のことなので、義氏は偽りの東禅寺の顔がよく見えず、やはり外見的なものでしか判断できなかつたのであった。

また、引用文の波線部、①「你的妻子今早已都殺了（中略）与你頭看、軍士把槍將秦明的妻子首級挑起在槍上、（中略）城上弩箭如雨点般射將下來」など、妻の首を切って、槍の穂先にかけて主人に見せる処や、城から矢が雨のごとく飛んできたような描写が第七篇では、「①やぐらより雨のごとく矢を射

出し、城中にのこせし右馬介が妻子の首を切って投げ出だしたり。」のようになっている。読んで分かるように、この描写も庭鐘が『水滸伝』からヒントを得たことを示唆している。

即ち、少なくとも下記の二点が共通点として読み取れるわけである。

- ①その妻を殺し、城に人を入れず、矢を放ち出す場面と矢が雨の如く射だされるという言葉の使い方
- ②敵側の服装、旗を使って、謀反をうまく演じきった点

庭鐘には『過目抄』という読書記録のようなものがある。「伝奇踏影篇」部「稗官有本」巻につきのような記録がある。

錢氏私誌徐神翁云天上方遣許多魔君下生人間作壞世界施耐庵水滸伝誤走妖魔本諸此也其呼保義玉麒麟諸号於癸辛雜識稗官亦不可無本
(同卷之一 9ウ10オ「稗官有本」の条全文⁸⁾)

施耐庵が水滸伝を著し、多くの魔物を人間界に下し、世界を壊すと言っている。また、「玉麒麟」即ち蘆峻義の名前をも出している。これは「占いの利用」部分でまた詳しく論じる。

また、「瓦礫場」の巻には次のような条がある。

白獺髓載江右一尉凡事不少怨尤多刻剥出巡之次市民邀請宴飲深夜而散兵卒皆醉倒初以為市民好客孰知是夜其被苦吏民乘兵卒之醉取其兵器故為尉劫掠部民家憲司邏捕録治後案成削去仕籍水滸伝中夜走瓦囚礫場用此事

(同卷之五 17オウ「瓦礫場」の条全文)

これはまさに『水滸伝』第三十四回「鎮三山大鬧青州道 霹靂火夜走瓦礫場」のことについて言及している証拠である。尚、『水滸伝』の「夜走瓦礫場」は『白獺髓』に載せている故事を利用したと庭鐘は言っている。

このような読書記録から庭鐘が確実に『水滸伝』を読んでいたと断言してよいのであろう。彼は読むだけでなく、その故事の出典も読書記録に書き残していた。また、印象に深く残った趣向を自分の読

本にも取り入れ、作品を面白くさせたのである。

(2) 間諜策—『水滸伝』第六十回「公孫勝芒碭山降魔 晁天王曾頭市中箭」の趣向利用

楠が使ったもう一つの戦略は間諜の戦略と言える。

草苺という侍を義氏のところに行かせ、義氏の信用を得て、腹心になってもらう。草苺が義氏のところに行った理由は、自分の妻が七党の田川と密通し、また彼女が田川によって隠されているためである。妻が自分を裏切って、ほかの男と密通することは夫にとっては、非常な恥辱であり、男のプライドを強く傷つけることである。だから、草苺が義氏のところへ奉公に出て、一日も早く田川の七党を討伐することを望んでいるのも、義氏から見れば、至極当然のことであっただろう。

『水滸伝』の中にも、間諜を派遣して、敵側の信頼を得て、最後に敵を遭難させたシーンがあった。これは第六十回「公孫勝芒碭山降魔 晁天王曾頭市中箭」の一節にあった。

晁蓋は軍隊を率いて、曾頭市を討伐しに行く。しかし戦いはしたが、曾頭市の将領一人をも捕まえていない。晁蓋がそのことに悩んでいる時に、突然二人の坊主が晁蓋の陣にやってきた。二人の坊主がこう言った。

小僧是曾頭市上東辺法華寺里監寺僧人、今被曾家五虎不時常來本寺作踐囉啤、索要金銀財帛、無所不為。小僧已知他的備細出沒去處、特地前來拜請頭領、入去劫寨、剿除了他時、当坊有幸。(私どもは曾頭市の東側にある法華寺の監寺を勤める僧です。この頃、曾家の五虎が、しきりに寺を荒らし、金銀財帛を奪い、勝手な振る舞いをしています。私どもは彼らの出沒する所が分かります。今日伺いに來たのは將領たちをお願いして、早く曾の寨に攻め込んで、彼らを殺してほしいからです。彼らが滅亡するならば、我々の寺にとってこれ以上ありがたいことはないです。)

晁蓋はこれを聞いて、大いに喜び、その日の夜に、兵士を率いて、二人の坊主に案内されて、曾家の寨に行く。しかし、二人の坊主がただ道をすこしだけ進んだ処で、姿を消してしまった。夜道なので、案内を失った軍隊も勝手に動けない。すると、四方か

ら太鼓を叩く音が聞こえて、見渡す限り、松明ばかりであった。晁蓋は兵士を引いて脱走しようとしたが、敵側の矢に射られた。なんとかして、逃げ出したものの、晁蓋に命中したその矢は毒矢なので、晁蓋は命を失ってしまった。

晁蓋は坊主は嘘をつかないと思って、他の人の忠告を聞かずに、坊主二人を信頼した。その結果、たくさんの兵士が命を失って、自分も命を失ってしまった。義氏もまた草苺を信頼し、最後になってはじめて、草苺が間諜であると分かった。

二人の坊主には妻はいないので、妻を奪われた恨みから間諜になるという要素は『水滸伝』の記述にはないが、しかし、二人の坊主と草苺との間諜のあり方に類似がある。

第三者の誰かに信頼してもらう方法のひとつは、自分が第三者と同じ敵を持っていて、その敵から被害を受けていることを伝えることである。二人の坊主は晁蓋たちと、曾頭市の五虎という同じ敵を持ち、草苺は義氏と、七党という同じ敵を持っている。それを信じてしまった晁蓋も義氏も悲惨な最期を迎えた。二人の坊主も草苺も間諜として役目を大きく發揮した。

また、「五虎」と「七党」の名前に注目してみると、数字の類似があることに気づく。『水滸伝』では、曾頭市の勇猛な五人兄弟のことを「五虎」と言う。これをヒントにして、川北にある頭たった七人の侍のことを「七党」としているのではないかと推測できる。

(3) 占いの利用—『水滸伝』第六十一回「呉用智賺玉麒麟 張順夜鬧金沙渡」

楠が使ったもう一つの戦略は占いである。

その頃、相模坊尊海という修験者がいて、人の悩みを祈祷し、効果があると言われ、百姓たちから尊敬されていた。義氏は普段このような祈祷を軽蔑していたが、東禅寺や川北のことで悩み、尊海を家に招いて、家運を占ってもらった。

尊海は義氏の手相を見て、「今日より七日の間、甚だ重き御つつしみなり」と言う。そして災いを避ける術を「唯御席所を別所へ移してさけ給へ。今日をはじめとして、毎日四方二里の外に忍び行きて、心をすまし、安居し給へ」と教えて帰った。

義氏は尊海の言葉を信じ、一日目は南方へ、二日目は東方へ、三日目は北方へ、昼は行って、夜は城に帰った。

四日目は西の方、高館山のふもと、新山の森という深く茂っている森に行って、心を澄まし、謹んでいた。日が西に落ちる頃、義氏が疲れて、敷皮の上で寝ていると、鋭い太刀打ちの音に目が覚めた。見れば、目の前に腹心の草薙大蔵と高坂中務が、腹心のもう一人の佐藤刑部を殺したところであった。「どうしたことか」と叱ると、森の奥から楠弾正左衛門、田川、大庄寺、酒田、山中などの七党がつぎつぎと現れてきて、草薙も高坂も七党の仲間であることが分かった。義氏は切腹し、武藤の家では、義氏の弟兵庫頭義興を立てて、十九代の屋形とした。義氏は修験者尊海の占いに対して、少しも疑うことなく信じ、尊海の言う通りにする。

中村幸彦氏は、この占いについて、「この山伏のやり方、諸事まぜこぜで、これだけで、怪しい奴なのだが、迷った義氏が気がつかないこととしている。これも一種の心理的謀略である事は、『水滸伝』第六十一回で、呉用が算者となって盧俊義を見て、東南方一千里の外に行けば難を避け得る、と説いた条の応用であろう。」⁹⁾と述べている。

補足すると、梁山泊の軍師呉用が北京の盧俊義を山に上がらせるために、算者の張氏と名乗って、盧俊義の吉凶を占う。そして、盧俊義には百日以内に大きな禍がふりかかると言い、その禍を避ける方法を「除非去東南方異地上一千里之外、方可免此大難。(東南方の一千里の外に行かないと、この禍を避けられる方法はない)」と薦めたことを言っているのである。

それに対して、第七篇では、尊海は義氏に災いを避ける術を「禍をさくらの道、唯御席所を別所へ移してさけ給へ。今日をはじめとして、毎日四方二里の外に忍び行きて、心をすまし、安居し給へ。さわがしき世の中なれば、かならず人にしられ給ふな。今日南方よりはじめて、東北にめぐりて出で給ふべし」と教えている。

中村氏の指摘した通り、その禍から逃れる方法が『水滸伝』の趣向であることは明らかである。また、占い師の言葉を信じてしまった盧俊義も義氏もひどい目に遭った。盧俊義は呉用の言葉に従って、東南方に行って、梁山泊に閉じ込められた。一緒に連れ

てきた下人は家に帰り、盧俊義が謀叛したと朝廷に告げ、盧俊義の妻と財産を奪ったのである。義氏は尊海の言葉を信じ、西の方に出かけたら、七党に包囲され、切腹させられたのであった。

が、庭鐘はその趣向を活かすときに、すこし工夫をしているのである。『水滸伝』では、あらかじめ呉用の身分を紹介しておき、算者となるのは、盧俊義を梁山泊に上がらせるための手段であることをはっきりと言っている。

が、庭鐘は尊海を登場させる時に、「其の頃日本の高山をあまねく巡拝し、出羽国の三山を拝して、尚奥へ通る修験者、相模坊尊海といへる山臥、人の憂をいのりて効験ありとて、村里の人民、是を尊敬すること、生不動ともいふべし」と紹介する。ここから、この修験者に関する情報を、深く探ろうとしても、あまり出てこない。唯一の手がかりである「相模坊尊海」の名前は、義経の家臣の常陸坊海尊を想起させるが、この修験者は一体どのような能力を備えた人物なのであろうか、と読者に自由に考えさせる余地をも与えている。はっきりと言わずに、余韻を残すことで、読者にいろいろと推測する楽しみを味わわせることができたのである。

小説や、軍記物語の中で、占いは一種の戦略としてよく使われるが、庭鐘もそれを第七篇に活かしている。彼は、占いを利用し、ストーリーに変化を持たせることに成功した。

3. 『莠句冊』における『水滸伝』魯達の人物像の受容

『莠句冊』は、都賀庭鐘の読本三部作のうち、三番目の作品にあたり、天明六年（一七八七）に大坂の六書肆によって出版されたのである。前作の『英草紙』、『繁野話』と比べると、中国の白話小説を典拠とするものが減っている。宇佐美喜三八氏は「莠句冊の九篇は前二者のそれに比して、一見支那小説との関係が遥かに密接に思はれるに係らず、今の所、具体的に明かなものは何程もない。西湖佳話中の一話に部分的に據つた一篇と、小説ではないが明代雜劇の趣向を学んだ一篇のあることが序文に記され、他に警世通言の一話の二部分をつづつ用ゐたことがみとめられる二篇のあることが知れるのみである」と¹⁰⁾述べている。宇佐美氏の言っている『西湖

佳話』の一話を取り入れたのは、『莠句冊』の第三篇「求冢俗説の異同冢神の靈問答の話」である。宇佐美氏のこの発言をヒントにして、徳田氏は『庭鐘と『西湖佳話』『聊齋志異』—『莠句冊』第三篇覚書—』¹¹⁾の論を展開し、『莠句冊』第三篇と、『西湖佳話』の「西冷韻蹟」と『聊齋志異』の「恒娘」との関係性を明らかにした。また「明代雜劇」というのは、徐渭の『四声猿』の事である。これは庭鐘が自ら明かしたことであり、すなわち「岐路の為に枝を折る、吉野猩猩は徐渭が四声猿を襲ひ、群る憤を南山の猿楽に漏すも、古人の辱に筆暢ざる所あり」である。徐渭の『四声猿』が第六篇の「吉野猩猩人間に遊て歌舞を伝る話」に取り入れられた¹²⁾。また「警世通言の一話」というのは、「王安石三難蘇学士」を指す。『英草紙』の第一篇「後醍醐の帝三たび藤房の諫めを折く話」にはすでに利用されているのであるが、『莠句冊』の第四篇「玉林道人雜談して回頭を屈する話」と、第八篇「猥瑣道人水品を弁じ五官の音を識る話」にも趣向として取り入れられている¹³⁾。

徳田武氏は、「(前略)『莠句冊』は、前作の『英草紙』『繁野話』にくらべると、いよいよ文体は晦渋、創作の方法は複雑になっている。各篇の創作意図と方法は一筋では解明ができず、従って庭鐘が、『莠句冊』において前二作からどのように推移した姿を見せているか、という問題を捉える段階にはほとんど到っていない¹⁴⁾と『莠句冊』の研究状況を語っている。

第三篇の先行研究としては、前引の徳田氏の論考以外、高田衛氏には「伝承・庭鐘・求塚—ある十八世紀小説の試行錯誤—」¹⁵⁾の論がある。高田氏は、求塚の伝承に対する近世的精神の有様を模索して小説を書く庭鐘の姿勢に注目して、庭鐘の小説を作る試行錯誤を考察した。

徳田氏は、『日本古典文学大辞典』(岩波書店)『莠句冊』の項目において、第三篇には『水滸伝』の魯達の面影が見られると述べていたが、具体的に魯達の人物像がどのように利用されていたかについては、論証がなかった。そして前掲徳田氏の論文の中にも、魯達に関しての具体的な考察がなかった。

本節では、第三篇に魯達の人物像はどのようにされていたかをはっきりさせたい。

(1)「求冢俗説の異同冢神の靈問答の話」のあらすじ

まず、第三篇「求冢俗説の異同冢神の靈問答の話」(以下「求冢俗説の異同」と略す)の内容を確認しておく。

摂津の国菟原の郷に、昔から求冢という三つの同名の塚がある。東にあるのは、住吉村にあり、「茅淳づか」とも呼ばれ、これは男の塚である。真ん中にあるのは、東明村にあり、「処女冢」という。西にある塚は、味泥村にあり、「処女冢」と呼び、これは菟原男の塚である。塚の形は前のほうが出ているため車塚とも呼ばれる。これはその傾いている様子が車の轆と似ているからである。

ある年、丹州の中野何某と友達の関の何某が真ん中の塚を尋ねた。その時に、関の何某に塚の神の靈が憑依して、中野氏と問答を行なった。

問答の後、塚に関する三つの物語が展開されていく。

一つは真ん中の塚の近くに宿る客人に宿の亭主が語るものである。二人の男がおとめを争い、おとめは思いわずらって、生田川に身を投げると、二人の男もそのあとを追って、同じく入水した。おとめの塚を中にして、左右に二男の塚を造った。これは所謂『大和物語』にある菟原おとめ伝説をそのまま利用しているのである。

そして、もう一つは、西にある味泥の塚の傍らにいた土地の人が、古い古跡を尋ねてくる旅人に語るものである。郡家なる庄官の娘は、多くの男性から慕われていた。そのうち、茅淳男は、艶書を何回も送ってきて、娘の心を得た。同時に、菟原を司る庄司何某が、郡家の娘を求めて自分の家に娶らんと願った。困った親は射芸の優れるほうに娘を嫁がせると決めた。菟原の男の勝ちであった。娘は一心に茅淳の男の勝ちと思い込んでいたので、父から菟原の男に嫁がせると聞くと、悲しくなり迎いの輿の中で死ぬと決めた。折から天台山から下りてきた円性法師が、茅淳の男の艶書が代筆であり、男の目的はこの家の財産にあったと見抜いた。茅淳の男がおとめを奪いに来た時、腰元のあけぼのをおとめの代わりに輿に入らせた。しかし、菟原の男性は本当のおとめが茅淳の男に奪われたと考え、途中茅淳男をおそ

い、相打ち死んでしまった。輿の中にいる腰元は自分がかつておとめの代筆をしたことを悔い、住吉川に身を投げた。親族は腰元を東明村に、菟原の男を味泥村に、茅淳の男を住吉に埋葬した。おとめは、三人の死は自分のせいであると思い、落髪して、三人の塚を守る。故に三塚ともに処女塚と呼ぶ。

最後の伝説は、東の塚に近い神社に雨宿りをする行脚の人に、山伏様の人が語ったものである。太古、この地に神の子孫海伯の一家があった。后妃は住吉姫である。住吉姫は君主と愛しあい、そのため民は逸楽に耽り礼節を軽んずる人が多くなった。臣の一人である小竹多はこれを憂いて、庶民の菟会のおとめに、化粧、楽器歌舞などを教えて、海伯に進めた。海伯は、菟会のおとめを気に入って、彼女を宮中に留めて、寵愛した。姫の戚家陳努の臣は、夢で姫が冷遇されることを知り、宮に参り、姫に海伯の愛を取り戻すための策略を教える。住吉姫はこれを用い、海伯の心をうまく取戻し、菟会のおとめをも宮中に留めた。住吉姫は、陳努と小竹多が功あるとあって、海伯の塚の東西に両臣の塚を営ませたのである。三つの塚はすべて男の塚である。

(2)「求冢俗説の異同冢神の靈問答の話」と『水滸伝』の魯達

『水滸伝』の魯達が取り入れられたのは、西なる味泥の塚の近所の里人が、古い古跡を尋ねてくる旅人に語る伝説で、すなわち二番目の伝説である。

郡家である庄官の娘は、茅淳の男が射芸比べで菟原の男に負けたのを知り、悲しくなり、嫁を迎えにくる輿の中で死ぬと覚悟した。母親は娘の姿を見て心配し、一家は悲しい雰囲気包まれていた。その時に、天台山から荒法師が下ってきたのである。以下原文を引用する。

天台より下山せし荒法師、言の君円性、幼名阿達池丸とよび、⁷氣力を売弄し大石を飛し大木を抜き、時の意興に違へば、師長の法師も打た⁸かれければ、山衆一致して逐ひ出しやる。筑紫へ還らんとて此所を経歴し一宿を求む。¹⁶⁾(注：傍線は筆者、以下同)

母親は「怨敵除の祈りにも」と、法師を家に入れた。すると、荒法師は家の悲しい雰囲気に気づいた。

¹此僧内のやうのうちひそみたるを見て、『いく日

の前に帰寂の人ありや』と問ふ。母氏つゝみかねて処女が身の難をかたる。

母親から家の事情を聞いた法師は茅淳の男の艶書を見ることを要求する。

僧云、『茅淳の男幾ばかりの才能ある。来書を見んずる』といふ。処女恥がはしらかぬ文をえらみ出したり。上がきに『あなことぐし』と書きたるもあり。『萩の葉ならば』とかきしも見ゆ。円性一観して『是恐らくは実に其人の自筆にはあらじ。艶書に人を雇ひたるも、是を其人の墨色と相るに、其人もまめにはなくこそ。文の詞も古き襲ひて肺腑より出るとも見えず。其求る所美色に非ず美産にあり。俗情軽薄誠とすべからず』と云。

母親は法師の言葉を聞き、人を茅淳の男の所に遣わし、その人柄を窺わせると、娘に艶書を送る人は茅淳の男ではなく、その家の寄人であり、出身の分からない人であった。いつも他人の家の婿になることを望んでいた。この話を聞いた円性は自分の疑いが的中したと思い、茅淳男を自分に任せ、「来らば取ひしぎてすてめ」と言った。そして、茅淳の男がおとめを奪いに来た。

ウかくて茅淳の男、先に超て奪ひとらんとみづから輿を□(□の中は手偏に昇である)せ来り。人数を道にひかへさせ、独自一個ひそかに女の許にいたりしが、障子の下にゐて、さすがうるはしくも得出ず、袖ばかり出したり。始より一目を見ぬことなれば、使女あけぼのをかざり障子を隔てかたらしむ。法師傍にありて筆をもて教へてこたへきかす。男云、『今日御身を迎へかえらずば尸を爰にとゞめん』と畏す。法師大に発作て怒るさまなれば、彼男をやあやまたんかと、家人等肝をひやす。法師答へていはしむ、『此ごろ伝に聞に、御身通ふかた一かたならずと。今より恐る、海陸の言早くも起らんことを』。男云、『それいさゝか思ひあたる事あり。輿だに入り給はゞ、逐去るにいとやすし』。女云、『それは逐るゝ人の身にさぞなげかしからん。さりととも二心なき誓の文を今ここに一紙かゝせ給へ』と、文かく四宝をつらね出し、物すきより見れば、彼男俄に赤面して、『二度の誓約はせぬ物にこそ』と身を退やうなり。女云、『是厭事にあらず。今こそ通ふかた多きを探

り知りぬれば、誓ひを給れ』と強て乞けるに、是非なく筆に信て紙を染るを見れば、過つる数々の通はし文には墨さへ似もせず、詞さへつゞかず、かんなも濫なりければ、果して最初の人にもあらず。『仮に詐を以て詐に対し、使女を代としてあざむきやり、世にかんなのはしりがきするものは技痒にたへかねて人に忌るゝは、因果の縁ところなるべきに、人の手をかりまどひて憂せきやつかな。此家の難は是までならんか。彼等は風流縁業、今や殺生に及べり』と袖を払ひて去りをはんぬ。

円性は真正面から茅渚男と対面することなく、曙をたてて彼女の側において指導をし、茅渚の男を試したのであった。男の書いた仮名を見て確信を下した。すなわちおとめに艶書を書いた人はこの男ではない、と。偽物を以って偽物に対すると行って、あけぼのをおとめの代わりに輿に入れることにした。

円性法師についての描写は、以上の三ヶ所にわたる。

徳田武氏は、この話では、『水滸伝』第五回の劉老人の娘を救う魯達の面影が投影されている。但し、全体の話は魯達のそれとは異なる。『大和物語』の伝説を潤色改変して、荒法師や侍女を添加するというのが、この話の作意であろうか¹⁷⁾と述べている。

氏の『水滸伝』の魯達についての言及はこれのみである。魯達の面影はどう投影されているのかについては、具体的な指摘はなかった。そこで、ここで魯達の人物像がどのように投影されているのかについて見てみたい。

まず、『水滸伝』の魯達はどういう人物なのかを見てみよう。

魯達が『水滸伝』（百回本）に登場するのは、第三回「史大郎夜走華陰県 魯提轄拳打鎮関西」、第四回「趙員外重修文殊院 魯智深大鬧五台山」、第五回「小霸王醉入銷金帳 花和尚大鬧桃花村」、第六回「九紋龍剪徑赤松林 魯智深火燒瓦罐寺」、第七回「花和尚倒拔垂楊柳 豹子頭誤入白虎堂」、第八回「林教頭刺配滄州道 魯智深大鬧野猪林」、第十七回「花和尚单打二龍山 青面獸双奪宝珠寺」、第九十九回「魯智深浙江坐化 宋公明大戰烏龍嶺」などである。

『莠句冊』の荒法師について「天台より下山せし荒法師、言の君円性、幼名阿達池丸とよび、氣力を

売弄し大石を飛し大木を抜き」と書いてある。「氣力を売弄し大石を飛し大木を抜き」の記述だけに注目しても、これは『水滸伝』第四回における魯達が五台山の大石で作られた金剛を壊し、第七回における魯達が相国寺にある楊柳の大樹を手で抜いた二条を意識していることは、明らかである。これは、魯達の人物像の典型的特徴であるからである。すなわち、庭鐘が意識したのは、徳田氏の述べられた「第五回魯達が劉老人の娘を救う」一条だけではない。魯達の荒っぽい性格、力の強さなどを含めて、彼の全体の面影を、円性法師に移そうとしたのであった。

魯達一魯智深は、金翠蓮という女性とその父親の味方をし、金翠蓮から不法の金を取った鎮関西を打ち殺した。その後、彼は逃げだして、代州雁門県に至った。ここで、意外にも金翠蓮の父親一金老に巡り合った。金老と翠蓮は魯達からもらった金を使って、牛車を雇い、今のところまで逃れたのであった。翠蓮は今趙員外の妾と成り、豊かに暮らしているのである。魯達の恩に報いたくて、趙員外は魯達を自分の村に住ませたのであるが、魯達が殺人犯ではないかと村の人々が疑ったため、仕方なく、趙員外は魯達を五台山に送り、彼を一人の和尚の弟子とさせたのである。¹⁸⁾しかし、魯達は五台山で和尚の戒めを破り、二回も酒を飲み泥のように酔い、寺の金剛の像を壊し、坊主たちを殴り怪我させた。寺の住持も彼を庇うことができず、彼を五台山より追い出して、開封の相国寺に行かせることにした。（『水滸伝』第三回、第四回）魯達は、開封に行く途中、旦が暮れたので、桃花庄という人家に、「小僧赶上宿頭、欲借貴庄投宿一宵、明早便行」（愚僧、宿場には間に合わないの、貴庄で一晩泊まらせていただきたい。明日早朝出発するから）と一晩宿らせてくれることを願った。

¹⁹⁾家の主人劉太公が彼の願いを聞き、家の中に入れてくれた。魯達は劉太公が何か悩んでいるのを見て、「太公縁何模様不甚喜歡」（太公は、なぜ浮かぬ顔をしているのですか）と氣使うと、劉太公は一人娘が今夜結婚することになったことを言いだし、これは不本意の事であり、他人に脅迫されたことと語る。

この経緯を知った魯達は、ある案を考えだした（第五回）。

智深聽了道、「原來如此。小僧有個道理、教他回心轉意、不要娶你女兒如何。」太公道、「他是個殺人不眨眼魔君、你如何能勾得他回心轉意。」智深道、「洒家在五台山真長老處、学得說因緣、便是鉄石人也勸得他轉。今晚可教你女兒別處藏了、俺就你女兒房內說因緣勸他、便回心轉意。」(智深、これを聞き、「そういうことであったか。愚僧に一つの考えがある。そいつに心を入れかえさせて、あなたのむすめをもらわぬようにするのは、いかがかな」と。大公、「あれは人を殺しても目ばたき一つせぬ魔もの、あなたさまがその心を入れ変えさせることなどできませんよ」と。智深言う、「わたくし、五台山智真長老のところで、因縁の説教を習っていました。鉄や石のような人でも、言い聞かせて心を入れかえさせます。今晚、娘さんをどこかよそへ隠しておき、おれがむすめさんのお部屋で、因縁を説き聞かせたら、そいつ、心を入れかえますよ」と。)

すなわち、魯達が考え出したのは、自分が劉太公の娘の代わりに、新婦の部屋で寝て、新郎を待ち、彼を教育することであった。そして、新郎が来ると、魯達は拳骨で彼をぶちのめした。新郎はあまりのことに驚き、傷だらけになりながらも慌てて逃げた。実は新郎はこの地方の盗賊の一人一周通という人である。彼には兄貴に当る人がいて、李忠と言う。李は弟の仇を討つと言って、劉太公の所に来たが、意外にも魯達とは知り合いであった。李は、魯達と渭州で一回会い、史進と三人で酒を飲んだ仲であった。李忠も魯達の俠義に感服していたので、魯達の面子を立て、周通が劉太公の娘をもらわぬことを約束した。

『莠句冊』と『水滸伝』の傍線部を比較してみると、以下のような共通点が見られる。

- ア 円性も魯達もともに性格が粗っぽく、力が強い。その性格のせいで勤めた寺から追い出された点と、途中で人家に一晚を乞う点。
- イ 両者とも、宿泊先の主人の機嫌がよくないのに気づき、これを気使ったところ、家の主人から家の難を語られる点。
- ウ 主人の家の難を知って助けようとする二人は、智慧を巡らし、難を乗り越えようと、案を

考えた点。(魯達は、自分が娘の代わりに、新婦の部屋で寝て、新郎が来ると、彼を拳骨で殴ったのに対して、円性は、家の娘の代わりに、腰元のあけぼのを茅渚の男と会話させ、茅渚の男が偽物であることを明らかにした。)

しかし、さらに注意を払うべきは、円性も魯達も、最後まで家の難を助け切っていないところである。そこまで、庭鐘は円性に魯達の面影を重ねていたのである。

李忠と周通は、魯達の俠を尊敬し、彼を自分の寨に招き、何日か招待したが、魯達は、二人が吝嗇な人であると思い、二人が外出して金銀を奪いに行くのを機に、彼等の家の財宝を取って寨から姿を消した。周通は魯達を「くそ坊主」と言い、李忠は「彼を追いかけて、赤恥を搔かせよう」と憤った。しかし魯達は、自分が李忠の財宝を取って姿を消した後、周通がまた劉太公の娘をもらいに行く和刘太公一家はどうなるかまでは、考えていないようである。いやむしろ、予見はしていても、そこまでは自分の力が及ばないとあきらめたのかもしれない。この点からも、魯達は緻密な性格ではなく、荒っぽい性格の持ち主であることが分かる。

一方、円性は、茅渚の男が偽物であるのを見破り、偽物の曙をおとめの代わりに茅渚のおとくに嫁がせると提案する。ここまではよいのであろうが、円性は、最後に「此家の難は是までならんか。彼等は風流縁業、今や殺生に及べり」の言葉を残して、「袖を払ひて去」って行った。すなわち、円性は、この家の難はまだまだあって、これから殺生が起こることを予見しながら、これは自分の力では及ばないものとして、姿を消した。

これで魯達と円性との間に、四番目の共通点が出てくる。すなわち、

- エ 二人とも最後まで宿泊先の家を守りきれず、これからの災難がまだ続くこと、あるいは続く可能性があることを知りながらも、その場を去って行った点。

である。

『大和物語』の優雅なおとめ伝説の世界に、俗の魯達の面影を投影する庭鐘の狙いは、何であろうか。第二説の始まりに、「又古き跡とむる旅人、西な

る味泥の塚にて田の畔に立る人に問へば『言長々し。我いほりへ』といぎなひて、『俚談さへ早昔となりぬ。(省略)』とある。すなわち、第二説は、一つの「俚談」として語られたのである。「俚談」である以上、俗の話でないといけない。そのため魯達が人の娘を救う一条をここに活かせたのであろう。これだけではなく、魯達の荒っぽい性格、ものすごい力持ち、寺から追い出されたなどの典型的な特徴は、円性の人物造形に巧みに利用されているのである。その性格の荒っぽい僧を入れることで、物語は優雅な乙女伝説から、生き生きとして現実味のある、面白みの出ている物語にがらりと変わることができた。

また、庭鐘以外、彼の弟子なる上田秋成も魯達を作品の中に取り入れたのである。『春雨物語』の「樊噲」である¹⁸⁾。『春雨物語』は文化五年にようやく形を得たのであるが、師弟関係にある庭鐘と秋成は、魯達の人物像に興味を持ち、これを読本に取り入れたところは共通している。秋成が庭鐘の影響を強く受けていることはよく語られている。

4. おわりに

『水滸伝』の日本での流行を一番語っているのは、曲亭馬琴がこれを翻案して、『南総里八犬伝』(一八一四～一八四二)を世に問うたことであろう。馬琴の前に、岡島冠山が『水滸伝』を訳し、『通俗忠義水滸伝』(一七五九～一七九〇)を出版し、山東京伝が『忠臣水滸伝』(前編一七九九、後編一八〇一)を出版していた。

しかし、これらはいずれも『英草紙』の出版された年(一七四九)より十年後か数十年後のことである。『水滸伝』は唐話のテキストとして当時の小説家¹⁹⁾たちに使われていることは、周知のようであるが、作品の中に持ち込まれて使われるようになったのは、時間の軸をたどってみれば、おそらく『英草紙』の第七篇が一番先であろう。

短編白話小説集の三言、二拍や文言文小説の『聊齋志異』のような作品だけではなく、中国の明清時代に流行していた章回体小説(長編小説)に一番目をつけたのは、やはり都賀庭鐘になるのであろう。都賀庭鐘の読本が『水滸伝』の日本における受容の発端であると言えよう。

注

- 1) 石崎又造 『日本近世における支那俗語文学史』 弘文堂書房 1940年
- 2) 中村幸彦 「読本発生に関する諸問題」(『中村幸彦著作集』第五卷所収 中央公論社 1982年)
- 3) 中村幸彦 高田衛 中村博保 校注、新日本古典文学大系 『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』の頭注 152頁(小学館 1995年)
- 4) 3に同じ
- 5) 『英草紙』の本文の引用新日本古典文学大系『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』(中村幸彦 高田衛 中村博保 校注、小学館 1995年)によるものである。
- 6) 3に同じ、154頁
- 7) 本論文における『水滸伝』の本文の引用はすべて『水滸伝』(施耐庵 羅貫中 中華書局 1998年)に拠るものである。翻訳は適宜中国古典文学大系『水滸伝』(平凡社 1968年)を参考にしながら、訳したものである。
- 8) 『過目抄』からの引用は『江戸怪異綺想文芸大系第二 都賀庭鐘・伊丹椿園集』(高田衛監修 国書刊行会 2001年)の『過目抄』の部による(木越治 校訂)によるものである。
- 9) 中村幸彦 高田衛 中村博保 校注、新日本古典文学大系 『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』の頭注 161頁(小学館 1995年)
- 10) 宇佐美喜三八 「垣根草と支那小説」(『国語と国文学』十卷五号 1933年)
- 11) 徳田武 「庭鐘と『西湖佳話』『聊齋志異』一『莠句冊』第三篇覚書一」(『日本近世小説と中国小説』第四章所収 青裳堂書店 1987年)
- 12) 『莠句冊』と徐渭の『四声猿』についての受容関係は、徳田武氏「庭鐘と『四声猿』一『莠句冊』第六篇一」(『日本近世小説と中国小説』第五章所収 青裳堂書店 1987年)が詳しい。
- 13) 『警世通言』卷三「王安石三難蘇学士」は『英草紙』だけでなく、『莠句冊』の第四篇「玉林道人雑談して回頭を屈する話」と第八篇「猥瑣道人水晶を弁じ五官の音を識る話」にも使われたことは、早くから山口剛氏(「読本の発生」『山口剛著作集』254頁)と麻生磯次氏(「読本の発生と支那文学の影響」『江戸文学と中国文学』100頁)によって指摘されている。
- 14) 徳田武 「庭鐘と『西湖佳話』『聊齋志異』一『莠句冊』第三篇覚書一」(『日本近世小説と中国小説』第四章所収 青裳堂書店 1987年)
- 15) 高田衛 「伝承・庭鐘・求塚」一ある十八世紀小説の試行錯誤一(『文学』六一三 1995年)
- 16) 『莠句冊』からの引用は『江戸怪異綺想文芸大系第二 都賀庭鐘・伊丹椿園集』(高田衛監修 国書刊行会 2001年)によるものである。

- 17) 徳田武 「庭鐘と『西湖佳話』『聊齋志異』—『莠句冊』第三篇覚書—(『日本近世小説と中国小説』第四章所収 青裳堂書店 1987年)
- 18) 『春雨物語』(日本古典文学大系 中村博保校注)「樊噲」の頭注にある。
- 19) 小説家とは、唐話、即ち中国語を教える人である。

参考文献

- 1) 拙稿 『英草紙』第七篇「楠弾正左衛門不戦して敵を制する話」小考—『史記』、『水滸伝』の趣向取りについて—(『近世文学研究と評論』第81号 2011年11

月)

- 2) 石崎又造 『日本近世における支那俗語文学史』 弘文堂書房 1940年
- 3) 中村幸彦 『中村幸彦著作集』第五卷所収 中央公論社 1982年
- 4) 徳田武 『日本近世小説と中国小説』 青裳堂書店 1987年
- 5) 麻生磯次氏 『江戸文学と中国文学』(三省堂 1955年)
- 6) 高田衛監修 『江戸怪異綺想文芸大系第二 都賀庭鐘・伊丹椿園集』 国書刊行会 2001年)